

## 鑑賞学実践研究5 : カラヴァッジョ作「聖マタイの召命」

著者	吉川 登, 榎木 千佳
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 人文科学
巻	52
ページ	17-27
発行年	2003-11-28
その他の言語のタイトル	Case Studies in the Science of Appreciation of Art 5 : Caravaggio's La Vocazione di San Matteo
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/1198">http://hdl.handle.net/2298/1198</a>

## 鑑賞学実践研究 5

—カラヴァッジョ作「聖マタイの召命」—

吉川 登・榎木千佳\*

### Case Studies in the Science of Appreciation of Art 5

—Caravaggio's "La Vocazione di San Matteo"—

Noboru YOSHIKAWA and Chika UMEKI \*

(Received October 1, 2003)

#### 1. はじめに

カラヴァッジョの名作「聖マタイの召命」(図1)は、事もあろうに画題になっている主人公の聖マタイが画面中のどの人物なのか明確ではないという問題的な作品である。聖マタイが誰であるのかという人物同定は「研究者の間でも決着がついていない」<sup>1)</sup>のである。本実践研究では、高校生諸君にこの問題に挑戦してもらい、自分なりの人物同定を試みさせることを中心課題とした。

授業構成のための理論的基盤として、この作品の解釈史と問題点を簡潔に提示している中村俊春の論文「視覚表現の多義性と解釈—カラヴァッジョ作「聖マタイの召命」に関する一考察—」<sup>2)</sup>を参照した。以下、中村論文に即して、「聖マタイの召命」について略述してみよう。

問題点は、画家カラヴァッジョが教会側から依頼された通りに描かなかったということにある。依頼者は「(収税所内にいた聖マタイを)弟子たちとともに通りをやって来た主イエスが使徒となるように召されたので、聖マタイは、主に従わんとしして机の席から立ち上がる」<sup>3)</sup>場面を画家が描くことを期待した。しかし、画家が実際に描いた場面では、「立ち上がる」動作を示す者はいない。何故カラヴァッジョはこのような描き方をしたのだろうか?人物同定を巡る解釈史は、この問いと密接に関連しながら展開していく。

画家が曖昧な描き方をしたにもかかわらず、実は絵画が制作されてから三百年以上にもわたって、画面の中で聖マタイが誰かということは問題にならず、聖マタイが「人物④」(図2)であることが自明であるとされてきたのである。なぜなら、17世紀の古典主義美学理論の権威であったベッローリが1672年の著作でそのような人物同定を行い、これが権威ある定説となっていったからである。

この伝統的な定説に初めて異論を唱えたのが、プラーターの1985年に発表された論文である<sup>4)</sup>。プラーターは「人物④」の左手に注目した。その指は二股に開かれ、確かに親指は自分を差す(身振りの意味:「召されたのは私ですか?」)ものの、その人差し指は「人物⑥」を指差している(身振りの意味:「召されたのはこの男ですか?」)。「人物④」の右手は税金を支払っている行為を表すものと解釈され、したがって、「人物④」は収税吏マタイではありえないということになる。一方、「人物⑥」は金勘定をする身振りから収税吏マタイと同定されたが、この人物は聖者にあるまじき行為—左手で紙幣をかすめとっている—を行っている。プラーターは、「守銭奴で罪深い俗人」として聖マタイを描いたところに画家の独創性を認めている。キリストの召命によって、罪人マタイは聖者マタイへと劇的に変貌するというわけである。一方、偽のマタイである「人物④」は宗教関係者を満足させるために、いわばダミーとして画面に描かれたのである。プラーターがこの解釈を行う際に依拠した観点は、主として「注文主である教会関係者の宗教画観とカラヴァッジョの大胆な画想との相克」という思想的な観点であり、解釈を決定づけたものは画面外の(思想的)コンテクストへの依存であったといえよう。

このプラーターの見解に対して、クレッチマーが1988年の論文で異を唱えた<sup>5)</sup>。クレッチマーによれば、この絵画は当時の宗教世界の対立—カトリックとプロテスタントの対立—を背景として生まれたものであり、画家は

\* 熊本県立球磨工業高等学校教諭

カトリック側の宗教思想の代弁者として、「人物④」を聖マタイとして描いたのである。神の救済は人間の側における意志や行為とは無関係である（いわゆる「予定説」）とする新教に対し、カトリックは人間の側の意思決定や善行を重視する。そのようなカトリックの思想を反映した絵画においては、聖マタイは、イエスの呼びかけに無関心な「人物⑥」ではありえない。聖マタイは、イエスの呼びかけに対し躊躇しながらも意思決定しようとしている「人物④」であるに違いない。このクレッチマーの解釈も、画面外のコンテキストに依存したものである。しかし、中村が懸念するように、「絵画作品という視覚作品が有する意味指示作用から離れた、それとは別の観点からの説明は、解釈者の恣意によってコントロールされる度合いが一層大きく」なるのであり、「極論すれば、解釈者は、人物④をマタイとするか、あるいは人物⑥をマタイとするか、それぞれの立場に従って、社会的・宗教的・芸術的などの観点から、歴史的事実と矛盾することがなく論理的な整合性を有する、自分の解釈を正当化してくれるような説明を考え出せばよい」<sup>6)</sup>ということになる。

1988年に出されたハスの論文は、画面外のコンテキストから再び画面のみに回帰し、そこに論拠を見出すことにより、過度なコンテキスト依存症を回避している<sup>7)</sup>。ハスは、二つの絵画、「聖マタイの召命」と「福音書を記す聖マタイ（第1バージョン）」（図4）との間の形態的・内容的な密接な関連に着目する。後者は、本来、前者と同じ場所（コンタレッリ礼拝堂）に設置される予定であったのだが、教会関係者に拒否されたため、今日その場所には別の構図の絵（第2バージョン）が置かれている。「聖マタイの召命」の「人物⑥」と「第1バージョン」の聖マタイは構図上ほぼ同一の着席の姿勢をとり、椅子のX字形の形まで揃えられている。構図上・形態上の同一性を比較の基準線として、両者は「精神的には俗と聖の両極端」<sup>8)</sup>を示し、かくして「イエスに召命される前のマタイの罪深さと回心後の信仰心の篤さとの対照性」<sup>9)</sup>が際立たせられるのである。しかし、

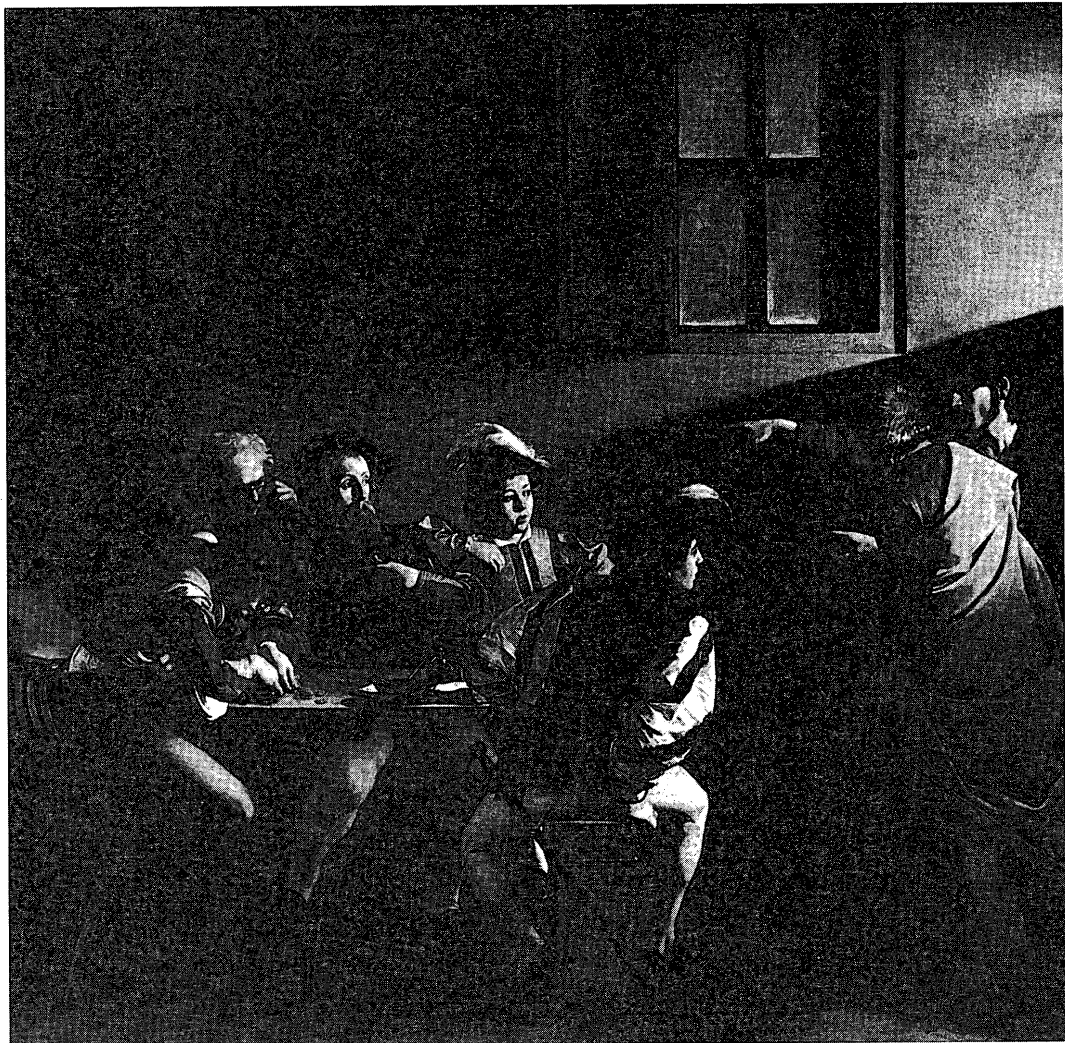


図1 カラヴァッジョ「聖マタイの召命」

「第1バージョンが拒絶されたために、鑑賞者が「人物⑥」をマタイと同定する鍵が失われてしまった」<sup>10)</sup>のである。

中村論文が提起している問題は、一言で言うと、視覚表現の多義性と言語表現の一義性との間のいかがわしく、胡散臭い関係の問題である。それは男女の関係のように、期待と思い込みに始まり、誤解と失望の内に終わることを運命づけられているようにも見える。さらにこの比喩を戯れに使えば、本質的に多義的な視覚作品を何が何でも一義的な意味に回収しないでは済まない美術史家の行為は、強姦に譬えることができるかもしれない。中村によれば、「作品の解釈を目指す美術史家は、画家によって言語表現にも匹敵するような一義性を有する視覚表現の実現が意図され、実際に実現されていたはずであるから、その意図を再現することこそが美術史家の役割と信ずるあまり、視覚表現の多義性を前にしてもその多義性を多義性として留保するという態度をとることがあまりにも稀である」<sup>11)</sup>。しかし、「多義性を多義性として」肯定していく実践こそ、鑑賞学に他ならない。

## 2. 高校生における鑑賞の授業

鑑賞学の実践は「見る」「知る」「考える」という三つの鑑賞行為の有機的連関によって構成される<sup>12)</sup>。いかなる発達段階といえども、鑑賞活動を開始するや否や、この三つの行為が関わってくる。しかしそうは言っても、どの発達段階でどの行為に重点が置かれるべきかということは、認識しておかねばならない。

一般に、小学校段階においては、「見る」ことに重点が置かれなければならない。「見る」ことは基盤的で基本的な行為であるから、この能力は小学校段階でしっかり定着させておかねばならない。これに対し、中学校段階では、「知る」ことに重心を移動する必要がある。なぜなら、この段階の生徒は知的好奇心に満ちており、知識を増やすこと自体に快感を感じる傾向があるからである。この段階では、美術に関する基盤的で常識的な知識を取り入れた授業構成が望ましいだろう。

一方、高校生段階においては、「考える」ことを主体とした授業を展開すべきであろう。受験勉強で知識に飽食している高校生は、知識それ自体に関心を示すことは少ない（ましてや、受験に関係のない美術に関する知識は彼らには不必要だろう）。彼らの関心は、「何故か」ということに注がれる。したがって、「イメージを用いる思考」を授業構成の核としなければならない。そのためには、鑑賞課題作品に対する深い読みと洞察が、あらかじめ教師の側でなされていなければならない。

作品に対する深い読みと洞察は、一朝一夕にして獲得できるものではない。それは、作品に対する研究者たちの長い研究歴を前提とする。一つのやり方として、本実践研究で行ったように、鑑賞課題作品について様々な角度から考察した研究論文を、授業実践のための理論的基盤として活用する、という方法が考えられる。いわば、美学・美術史研究の成果を変形・解体・編集・加工することによって、それを鑑賞学実践研究の素材にしてしまうのである。こうして、鑑賞の授業は、学問的・理論的骨格と、イメージの多義性を容認する鑑賞学の柔軟でしなやかな肉体とを合わせ持つことになるのである。

## 3. 授業の前提と準備

日時：平成 15 年 7 月 15 日 第 3 校時

場所：熊本県立球磨工業高等学校

生徒：熊本県立球磨工業高等学校 機械科 1 年 B 組 男子 40 名、美術は 1 年次のみ必修 2 単位

(1) 題材について—カラヴァッジョ作「聖マタイの召命」—

高校生にとって、カラヴァッジョの名や作品は印象派の画家やルネサンスの芸術家ほど慣れ親しんだものではない。しかし、その生々しいまでのリアルな描写は、彼等の心を強く引き付けるようである。彼の作風はその写実主義と明暗のコントラストの激しい劇的な光の効果を特徴とする。その作品の多くはキリスト教を主題としたものや、精緻な筆致の静物画である。今回取り上げた作品はカラヴァッジョの代表作とも言える「マタイの召命」である。

この作品の主題はタイトルの通り「マタイの召命」である。この物語は第一福音書記者であり、十二使徒のひとりであるマタイがキリストに出会い、神の啓示を受ける場面である。当初は収税人をしてマタイであるが、

ある時収税所にいたところ、弟子を連れてキリストが現われマタイに歩み寄り「私について来なさい」と告げる。右端の人物はキリスト教美術に関する基本的な知識があればキリストではないかと思ひ至ることができる。しかし、肝心のマタイは誰か？その問に関する明確な答えは用意されていない。これまでに研究者による論争、新解釈が発表され、どの解釈にも信憑性があり、また確実な理由がない、という非常に曖昧さを残す作品である。

この作品を取り上げた理由はまさにその「曖昧さ」にある。高校生は一般的に曖昧なものを嫌い、物事を明確にしたいとする欲求が強い。この作品を前にして彼等を感じるジレンマを「見る」「知る」「考える」の3つの流れに導き、より深い作品鑑賞の態度を育てるのが本時の目標である。

### (2) 生徒について

実業系の学校なので、特に美術史に興味があるという生徒は極めて少ない。しかし、質問を投げかけたり、発表を求めると活発に発言することができる。

どちらかと言うと「考える」ことを面倒に思いがちであり、答えのみを求めようとする傾向があるので、この作品世界にいかにか引き込むかを工夫した。

### (3) 指導のポイント

- ①学習過程は「見る」「知る」「考える」の3段階とする。高校生の場合、小・中学生と異なり、専門的な知識を受け入れ、作品に対する深い解釈も可能である。「見る」「知る」「考える」の3つの過程を相互に連繋させ、「考える」に重点を置きながら、一つ一つの鑑賞行為の質を少しずつ高度なものにするよう配慮する。
- ②「マタイは誰なのか」、研究者の間でも論争中であり正しい一つの答えがあるわけではない。自分たちがカラヴァッジョの真意を見つけるかもしれない、と動機付けをする。ただし、安易な犯人探しに陥らないよう留意する必要がある。
- ③今回は1年生最初の鑑賞の授業であり、まずは「見る」態度を育て、「見た」こと「知った」に基づいて考察に導く作品分析の流れを身につけさせることに重点目標を置く。
- ④使用教材は黒板に大判の図版(A1)を掲示。図版のカラーコピー(A4)、資料(A4、資料1「聖マタイの召命について」、資料2「過去の解釈の歴史」)、ワークシート(A4)それぞれ1人1枚配布する。

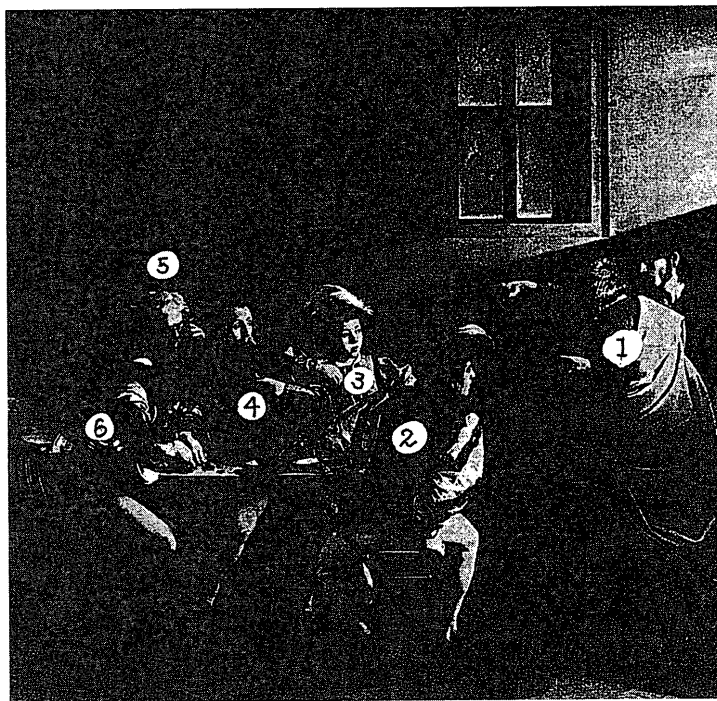


図2 カラヴァッジョ「聖マタイの召命」の図解

## 4. 授業の展開

黒板に大判の図版 (A1) を掲示。図版のカラーコピー (A4)、資料 (A4、資料1「マタイの召命について」、資料2「過去の解釈の歴史」)、ワークシート (A4) それぞれ1人1枚配布。

〈 〉内は生徒の反応, 【 】は教師の説明, 発問等

## ①導入 (10分)

i) 見る①・・・無前提で見る (6分)

点呼, 本時の説明をし, ひとり一枚カラーコピーを配付する。【この絵をよく見て下さい。】作品を見る時間を1分程与える。

〈配付してすぐ『最後の晚餐』だ』という声があがる。【どうしてそう思う】と聞くと「テーブルを囲んでいるから」という声上がる。〉

【確かに、テーブルを囲んでいる人と、右に立っている人がいますね。それから、左側から光が差し込んでいてそこにいる人の表情が浮かび上がっていますね。】

ii) 考える①・・・第一印象から (4分)

ワークシートを配付する。【『最後の晚餐』じゃないかという意見がでました。みんなは、これは何の場面だと思いますか。ワークシートに記入して下さい。】2分程時間を与える。

【それでは発表して下さい。】列を指定し, 5~6人発表させる。

〈反応はクラスによってまちまちだがこのクラスは積極的に意見をいう生徒が複数いた。発表の内容は「会議をしている」、理由は「人が集まって話し合っているから」と「ギャンブルをしている」、理由は「机の上にお金があるから」というものが多かった。机の上にお金があるという意見がでたとき、机の上に注目させる。また、「お金を盗んだのを尋問しているところ」という意見を出した生徒はドラマ仕立てで右端から「お前が盗んだんだろう」「いやおれじゃないよ。こいつだよ」と登場人物一人一人の表情を読み取りその状況を説明した。〉

※ワークシートのまとめ1

問①「これは何の場面だと思いますか？」

答え ア 会議中 (13人)・・・

理由：みんなでテーブルを囲んで話し合っているようだから

イ 賭事をしている (7人)・・・

理由：机の上にお金があるから。暗い所にいるから。

ウ 泥棒を捕まえた場面 (4人)・・・

理由：右の2人がお金を盗んだ人を探しているように見えるから

エ ケンカが始まる場面 (2人)・・・

理由：二組に分かれているから。指の差し方。

オ お金を数えている (2人)・・・

理由：机の上にコインがある。お金を数えている。

カ 無回答, わからない (12人)

出てきた意見をまとめる。【確かに人が集まって何かしているようですね。それから、右端に何か指差している人がいます。その人にびっくりしている人もいますね。机の上のお金は本当にギャンブルをするために置いているのでしょうか。】

## ② 展開 (30分)

i) 知る①・・・基礎知識 (5分)

資料1をもとに作品について説明をする。重要な部分は板書する。【この作品は『マタイの召命』という作品です。『召命』というのは何かと言うと、誰かに呼ばれることです。それもただの人に呼ばれるのではなくて神様に呼ばれることを差します。それではその神様はなんの神様かと言うとキリスト教の神様です。・・・】

キリスト教, キリストについて, マタイについて, 作者について, 制作された時代について資料1と板書をもとに簡単に説明する。

※資料1の内容

題名「聖マタイの召命」, 1598~1601年制作, 油彩

「召命」: ある使命を果たすよう神から呼びかけられること

## ア) マタイについて

第一の福音書（新約聖書の中でイエス＝キリストの生涯・教訓を記録したもの）の著者で十二使徒の一人。もとはレヴィという名前で、収税人をしていた。あるとき収税所に座っていたマタイにキリストが歩み寄り、「私について来なさい」と告げる。これが「マタイの召命」という場面である。彼はキリストの昇天後、他の弟子達と一緒にエルサレムへいったとされるが、その後の足取りは不明である。一般に、殉教死したと信じられている。

## イ) 作者について

カラヴァッジョ Caravaggio (本名：ミケランジェロ・メリーシ) 生没年：1573～1610年  
北イタリア、ベルガモ近郊カラヴァッジョ出身（名前は出身地に由来しています）  
ローマで活躍。当初は苦労したが枢機卿（カトリック教会における教皇の次に高位の聖職者）デル・モンテの目に留まりお抱えの画家になる。劇的な写実主義と芝居がかった光の効果によって全く新しい美術をつくった。  
1606年、友人を殺害し、逃亡生活を送る。37歳の時ナポリで死亡。

## ウ) 注文した人について

教会関係者。「弟子と共に通りをやって来た主イエスが使徒となるよう召されたので、マタイは主に従がわんとして机の席から立ち上がる」場面を注文された。

## エ) 制作された時代について

1517年、宗教改革が起こり、キリスト教会がカトリック（旧教）とプロテスタント（新教）に分裂した。カラヴァッジョの支援者はカトリック教会である。・・・以上

## ii) 見る②・・・キリストに注目、知識と観察を結び付ける練習（3分）

【キリストは誰かわかりますか？】

<「頭に輪っかがついている」と一人が発言すると、皆それにつられて作品に注目する。>

【よく気が付きましたね。この頭の上の細いリングはよく天使や神様の頭に付いているものと同じですね。それから、この鬚が生えた長髪のやせ形の男性は代表的なキリストの表現の方法です。】

【ここまでで何か質問はありませんか】

## iii) 考える②・・・資料1と「見たこと」をもとに推理する（7分）

【キリストは多分この人だと思います。今日の授業で何をしたいかという、マタイは誰かということをもみんなに考えてもらいたいです。】

【マタイはこの中の誰だと思いますか。見たことと資料をもとに考えて、ワークシートの2番に考えを書いて下さい。】

2～3分時間をおく。その間、教室をまわり、何をすればいいのかよくわからない生徒に対応する。

【それではマタイだと思う番号に手をあげて下さい。】

一列指定して、順番に答えさせる。他に意見があるか求める。ほとんどがマタイは左端の人物⑥であると答えた。その理由はみんなが指を差していることに注目していることが多く、次に机の上のお金と資料1のマタイは収税人であったという事柄を結び付けた理由が出た。

## ※ワークシートのまとめ2

問②「マタイはこの中の誰だと思いますか。最初の印象と資料①をもとに答えて下さい」

答え 人物⑥ (33人)・・・理由：指を差されているから (24人)

(内訳) 指を差されているから (12人)

人物④が指を差しているから (7人)

みんなが指を差しているから (4人)

キリストに指を差されているから (1人)

(マタイは収税人なので) お金を数えているから (4人)

意味ありげな行動をしている (2人)

自分が呼ばれていると思って下を向いている (1人)

ばくちに負けて下を向いていると思った (1人)

カン (1人)

- 人物④ (2人)・・・理由：特になし
- 人物⑤ (2人)・・・理由：ふけているから (1人)  
税金を納めているように見えるから (1人)
- 人物① (1人)・・・理由：カン
- 人物② (1人)・・・理由：自分はマタイだという顔をしている
- 人物③ (1人)・・・理由：きれいな顔をしているから

iv) 知る②+見る③・・・解釈の歴史+細部を観察 (15分)

資料2の配布。【実はマタイは誰なのかははっきりした答えは出ていません。これまでの歴史を見るとマタイは④か⑥ではないかという意見に分かれます。最初はずっとマタイは④だと思われていました。なぜなら一番権威のある人、ペッローリがそういったからです。しかし、20世紀になってちょっと違うんじゃないかという意見が出てきました。】

【ペッローリは④の身ぶりが「呼ばれたのは私ですか」といっていると考えました。しかし、親指は確かに自分を差していますが、人差し指は別の人を差していますね。】と、身ぶりをまねしながら、説明をする。必ず、資料と図版を照らし合わせる。

※資料2の内容

過去の解釈の歴史

ア) ペッローリの考え (17世紀)

人物④ (指差している老人) がマタイである。

根拠：左手の動作は「召されたのは私ですか」という身ぶり。

イ) プラターの考え (1985年)

人物⑥ (貨幣を数えている若者) がマタイである。

根拠1: 人物④の親指は自分をさしているが、人差し指は人物⑥を差している。「召されたのは私ですか、この人ですか」という身ぶり。

根拠2: 人物④も人物⑥も手が貨幣に触れているが、人物④の動作はお金を支払っているように見える。しかし、人物⑥の動作はお金を受け取っているように見える。つまり、人物⑥は収税人か？

根拠3: 作者の意図はマタイを守銭奴である罪深い俗人として描き (しかも右手は貨幣をかすめ取っている)、キリストの導きによって俗人から聖人へ変化したドラマを表現しようとした。

根拠4: 注文者からの反発を予想して④をダミーとして描いた。

**資料1**

『マタイの召命』 1598-160年制作 油彩  
『召命』: ある使命を果たすよう神から呼びかけられること

① マタイについて  
第一の福音書 (新約聖書の中でイエス=キリストの生涯・教訓を記録したもの) の著者で十二使徒の一人。もとはレヴィという名前で、収税人をしてた。あるとき収税所に座っていたマタイにキリストが呼び寄り、「私について来なさい」と告げる。これが『マタイの召命』という場面である。彼はキリストの昇天後、他の弟子達と一緒にエルサレムへいったとされるが、その後の足取りは不明である。一般に、殉教死したと信じられている。

② 作者について  
カラヴァッジョ Caravaggio (本名: ミケランジェロ・メリーシ) 生没年: 1573  
北イタリア、ベルガモ近郊カラヴァッジョ出身 (名前は出身地に由来しています)  
ローマで活躍。当初は苦勞したがる報酬 (カトリック教会における教皇の次に高位の聖職者) デル・モンテの目に留まりお抱えの画家になる。劇的な写真主義と芝居がかった光の効果によって全く新しい美術をつくった。1606年、友人を殺害し、逃亡生活を送る。37歳の晩年に死亡。

③ 注文した人について  
教会関係者。「弟子と共に通りをやって来た主イエスが使徒となるよう召されたので、マタイは主に従がわんとし、机の席から立ち上がる」場面を注文された。

④ 制作された時代について  
1517年、宗教改革が起り、キリスト教会がカトリック (旧教) とプロテスタント (新教) に分裂した。カラヴァッジョの支援者はカトリック教会である。

Memo

図3 資料1 (作者および作品について)

**資料2 (過去の解釈の歴史)**

① (指差している老人)  
ペッローリの考え (17世紀)

根拠: 左手の動作が「召されたのは私ですか」という身ぶり

？このように決めつけられるか

反論: プラター (1985年)

根拠: この作品は宗教改革を背景にしており、カラヴァッジョはカトリックの側に立っている。  
神の救済に対する考え方の違い  
プロテスタント: 人間の意思は関係ない  
カトリック: 人間の働きが不可欠

④には人間関係の意思決定が関わっているので、呼び掛けに全く負付いていない⑥であるはずがない。

② (貨幣を数えている若者)  
プラターの考え (1985年)

根拠1: ④の親指は自分をさしているが、人差し指は⑥を差している  
「召されたのは私ですか、この人ですか」  
根拠2: ④も⑥も手が貨幣に触れているが  
④の動作: お金を支払っているように見える  
⑥の動作: お金を受け取っているように見える  
→ 収税人か?  
根拠3: 作者の意図はマタイを守銭奴である罪深い俗人として描き (しかも右手は貨幣をかすめ取っている)、キリストの導きによって俗人から聖人へ変化したドラマを表現しようとした。  
根拠4: 注文者からの反発を予想して④をダミーとして描いた。

反論: ハース (1988年)

根拠: 作者が描いた他の関連するテーマの作品から主張: 『福音書を記すマタイ』とポーズ、椅子の形をわざと似せて描いているのではないかと一人の人物を聖と俗の二つの観点から描こうとしたのではないかと

この論争に結論は出ていません

図4 資料2 (過去の解釈の歴史)



## ウ) クレッチマー (1988年)

プラターへの反論, 人物④がマタイである。

根拠: この作品は宗教改革を背景にしており, カラヴァッジョはカトリックの側に立っている。神の救済に対する考え方の違いが作品に現われているはず。

プロテスタントは神の救済に対し人間の意思は関係ない。対して, カトリックは人間の働きかけが大事であるという考えをもとに, 人物④には人間側の意思決定が現われているので, 呼び掛けに全く気付いていない⑥であるはずがない。

## エ) ハス (1988年)

人物⑥がマタイである。

根拠: 作者が描いた関連するテーマの作品である「福音書を記す聖マタイ」に描かれたポーズ, 椅子の形が似ていることを示し, 一人の人物を聖と俗の二つの観点から描こうとしたのではないかと考えた。

※この論争に結論は出ていません

・・・以上

## ③まとめ (10分)

i) 考える③・・・マタイはだれか? 自分なりの考えをまとめる (8分)

【それではここまで見たこと, 知ったこと, 考えたことをまとめて, あらためてマタイは誰か考えてみましょう。④と⑥以外でもいいです。終わった人は感想を書いて下さい。】

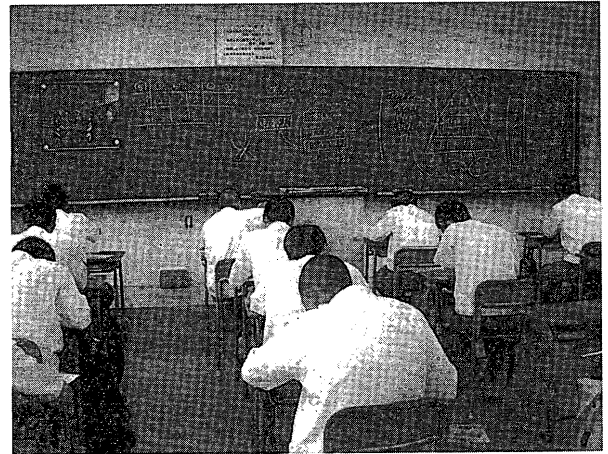
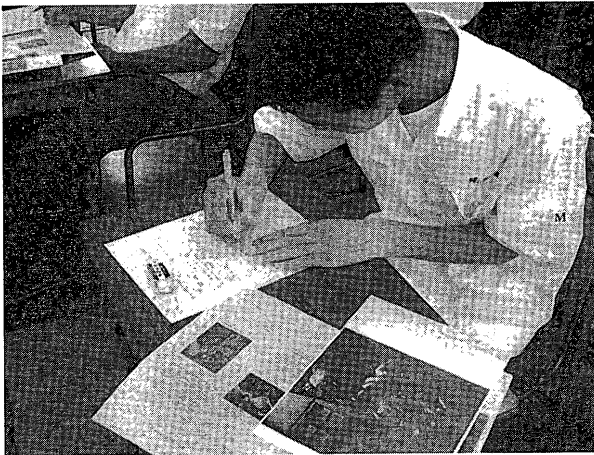


図5 授業風景

※ワークシートのまとめ3

問③「資料2をもとにあらためてマタイは誰か考えてみて下さい」

答え 人物⑥ (30人) …理由: プラターの意見に賛同して (13人)

指を差されているから (7人)

お金を受け取っているから (6人)

マタイは人物②③④のような貴族的な人物ではないと思う (1人)

特になし (3人)

人物④ (6人) …理由: 偉そうだから。収税人としての責任感がありそう。 (2人)

キリストに指差されたが, 何かわからず恐くて, 人になすりつけている (1人)

お金を置くというより, 取っているように見える (1人)

この人が一番目立つ (1人)

特になし (1人)

人物① (1人) …理由: 自分がマタイだが人になすりつけている

人物② (1人) …理由: 人物①が指差していて, 「おれか?」という動作をしている

人物⑤ (1人) …理由: 人物④は人物⑤を指差しているように見える

人物④と⑥両方（1人）・・・理由：ハスの解釈のように聖人と悪人の両方を描こうとしたのではないか  
ワークシートの間③では問②と比べて、選んだ理由を箇条書きではなく、文章で論理的に表現しようとする努力が半数以上の生徒に見られた。また、資料2の解釈を読んだことで、作品に自分なりの物語をつくらうとする傾向がより強まったように感じた。

ii) 本時のまとめ（2分）

マタイは誰と思うか手をあげさせ、授業のまとめを述べる。

※ワークシートのまとめ4

感想

ア 一枚の絵の中に複雑な事柄が含まれているのに驚いた（20人）

イ このような授業は初めてで驚いた（4人）

ウ 真実は誰にもわからない（2人）

エ きれいな絵だった（1人）

オ その他、特になし（13人）

## 5. 鑑賞過程に即した授業結果の分析

(1) 「見る」

「無条件で見る」、「ポイントを絞って見る」、「資料を検証しながら見る」、「根拠を探すために見る」など「見る」という行為にも様々な段階がある。焦点となるテーマがある場合、授業の流れの中でどの段階の「見る」が必要なのかを把握し、効果的に彼等の視点を導かなければならない。

しかし、画像の中の根拠を十分に見つけずに人物なり意味を特定する行為を指導者が最初に行ってしまうと生徒達の「見る」を制限してしまう。例えば、「マタイの召命」の場合「この人はキリストである」と考えることは基本的な知識があればできるが、生徒にはキリスト教的世界はほとんど未知の領域である。「この絵はこうですよ」と教師の言葉をただ盲目的に信じさせるのではなく、資料の情報と画像に現われるサインを結び付けて意味を考える姿勢を指導者が示さなければならぬ。そのきっかけをつくるには、彼等が見えていないものを見せ

鑑賞 『マタイの召命』ワークシート  
大塚 年 12 組 番 氏名 \_\_\_\_\_

① これは何の場面だと思いますか？  
お金がなくなったので人々を苦しめている。

理由  
お金の無い様子を写して、苦しんでいるように見えたから。

② マタイはこの中の誰だと思いますか？  
最初の印象と資料アをもとに考えて下さい  
6 番の人物

理由  
6番の人は、自分が呼ばれると思、て下を向いているように見えたから。

③ 資料イをもとにあらためてマタイは誰か考えてみてください  
6 番の人物

理由  
やはりマタイは、6番だと思う。  
僕はアラターの考えと同じで、4番の人もあげいけど、4番は全然どうもしていないけど、6番は気がしている人だから、気がかならふりをして、顔をかくしているように見えたから。

④ 感想  
こんな1つの絵でこんなにも多くのことを表わしている人たちが、思った。

図5 ワークシート記入例

ることこつがあるようである。「マタイの召命」であればキリストの光輪である。これはこの人物がキリストであるという情報がなければ見落とししてしまいがちな小さなサインである。この点に触れた時、生徒の眼差しが画面に集中した。授業の計画を立てる際、生徒に驚きを与える「見る」ポイントをあらかじめ用意しておくのも効果的であると感じた。また、それは人物⑥の左手の所在のように作品解釈で重要なポイントであることが多い。

### (2) 「知る」

「知る」の資料としてプリントを作成したが、重要な部分は板書をした。板書をする事で全員を指導者に注目させ、伝えたいことを簡潔にまとめて周知することができた。

今回は世界史を履修してない学年であったが、世界史の授業とリンクすると、鑑賞の領域を超えた複合的な授業も十分可能であると感じた。新しい情報を生かすには既知の情報が必要である。このような実践を続けていくうちに生徒の言語的・非言語的な情報の双方を処理する力をつけ、知識の総量が増していけば、鑑賞の学習もより豊かなものになると思う。

しかし、反省点の一つとして、俗人としてのマタイを表現しようとしたというプラーターの説に片寄った説明をしてしまい、「知る」ことが「考える」に短絡的に結びつきすぎてしまったことがあげられる。

### (3) 「考える」

より深い思考を求める場合、それに相応しい題材が必要である。つまり「考えるにたるテーマであるか」、当たり前であるが充分指導者が検証しておかなければならない。

また、高校生に相応しいより深い思索に導く場合、「見る」「知る」「考える」を直線的な流れにするのではなく、「見る」「知る」「考える」の行為を複合的に結び付ける必要がある。そのためにはそれぞれの段階を把握し、授業の展開の中に効果的に配置することが求められる。

授業で鑑賞を行う教育的意義はブレンストーミングをしたり、考えを出し合うことによって生徒達の思考が活発に刺激されることにある。そして、表現する為に、「考えた」ことに対してより確実な根拠を探そうとする。ポキャブラリーと思考のレベルはある程度比例すると考えても差し支えないと思うが、この学習によって相乗効果が期待できる。

## 6. おわりに

授業展開は、「見ること」と「知ること」を往復しながら、「考えること」をそこに織り込んでいくというプロセスによって進行する。まず、作品を無条件で見せ、それがどのような場面であるかを考えさせる（「見る①」「考える①」）。授業では、直ちに『最後の晩餐』だという意見が出たが、よく見ると、食事場面でないことが分かる。テーブルの上にあるのは皿ではなく貨幣である。つまり、直観的な印象が細部の観察によって覆されたわけである。胡散臭い連中がテーブルにお金を載せて何事かに夢中であると判断されて、この場面を「賭け事をしている」場面であると考えた意見が多かった。これはごく自然な反応である。

次に、この作品がどのような場面を描いたものを説明する（「知る①」=資料1）。このことによって、「考える①」で出された結論は修正される。「知る①」のフィルターを通して、新たに作品を見（「見る②」）、聖マタイが画面中の誰であるかという問いに対する回答を考える（「考える②」）。マタイを同定する手掛りは、主として、「キリストに呼びかけられているのは誰か」ということと、「マタイが収税吏であった」ということである。ここでの生徒たちの反応は、ある意味、予想外の展開を見せた。この授業を計画した当初、われわれは、キリストの呼びかけに反応し人物群の中央にいて身振りの雄弁な「人物④」を聖マタイとする意見が多いのではないかと予想した。ところが、生徒の大半（33人）は、「人物⑥」を聖マタイと考えたのである。その理由は、主として、「指差す身振り」と「金勘定」の二点である。つまり、「人物⑥」は「人物④」の人差し指によって指差されており、かつつつむいて金勘定をしているのである。生徒たちは「キリストの呼びかけに反応する」ことよりも、「収税吏として金勘定をする」ということを判断基準として結論を出したように思われる。鋭い観察だといえるが、生徒たちは「人物⑥」が金勘定をしながら紙幣をちょろまかしていることには気付いていない。さらに、厳密に言えば、人物の身振りだけで、税金を支払う側と受け取る側を誤りなく決定することは難しい。見方によっては、「人物④」が税金を受け取る側だと考えることもできる。派手な衣装の「人物⑥」は（「人物②③」の仲間のような服装である）、そのふてくされたような態度ともども、官吏としては相応しくない感じがする一方、「人物④」は（「人物⑤」と同様に）その服装・態度によって、より官吏風なのではなからうか？つまり、一見鋭い

と思えた生徒たちの観察は、さらに精密な観察による修正や再修正といった試練を経たものではなく、いささか安直な結論でしかなかったのである。このあたりに、このクラスの限界—鑑賞経験の浅さと緻密で執拗な観察不足—が垣間見える。

そして最後に、この授業のクライマックスに入る。「聖マタイの召命」を巡る解釈史が示され（「知る②」）、この知見をもとに再度画面を見（「見る③」）、どの学者の見解が正当であると思うか判定し、改めて「聖マタイは誰か」という問いに答える（「考える③」）のである。当初のわれわれは、プラターの新説の紹介によって「人物④」から「人物⑥」への劇的な逆転が起こるのではないかと予想していた。しかし、プラターの説は、マタイをすでに「人物⑥」と同定していた生徒たちの判断を追認するだけの役割しか果たさなかったようだ。かつ、この段階での生徒の反応は、極めて低調であるといわざるを得ない。解釈史を踏まえてそれを知的に考察し、絵画の分析に応用するという姿勢がほとんどない。思考力の欠如がうかがわれる。こういったところにも、このクラスの能力の限界が確認できる。

以上のような授業展開から、本授業の成果は残念ながらはなはだ不満足なものであったと言わざるを得ない。本実践研究のような授業は、或る一定レベルの知的な好奇心と思考力と観察眼を要求するものであり、そのような要求に応えるクラスでこの授業を再度行うならば、十分な成果が期待できるであろう。とはいえ、そのような要求にかなわぬクラスといえども、こうした授業を重ねていく内に観察力と思考力はおのずと定着していくものである。

## 注

- 1) 三浦 篤, 「まなざしのレッスン」①西洋伝統絵画, 東京大学出版会, 2001年, 101頁.
- 2) 中村俊春, 視覚表現の多義性と解釈——カラヴァッジオ作「聖マタイの召命」に関する一考察——, 京都大学美学美術史学研究会編「芸術の理論と歴史」270頁～279頁, 思文閣出版, 1990年.
- 3) 同上, 271頁.
- 4) Prater, Andreas., Wo ist Matthaus, Beobachtungenn zu Caravaggios Anfängen als Monumentalmaler in der Contarelli-Kapelle, "Pantheon" 43, 1985, S. 70～74.
- 5) Kretschmer, Hildegard., Zu Caravaggios Berufung des Matthaus in der Cappella Contarelli, "Pantheon" 46, 1988, S. 63～66.
- 6) 中村俊春, 前掲書, 276頁.
- 7) Hass, Angela., Caravaggio's Calling of St. Matthew Reconsidered., Journal of the Warburg and Courtauld Institutes 51, 1988, pp. 245～250.
- 8) 中村俊春, 前掲書, 278頁.
- 9) 同上, 278頁.
- 10) 同上, 278頁.
- 11) 吉川 登, 行為としての鑑賞——鑑賞学の序章としての鑑賞行為の分析——, 大学美術教育学会誌, 第25号, 1993年.

## 参考文献

- 吉川 登, 行為としての鑑賞——鑑賞学の序章としての鑑賞行為の分析——, 大学美術教育学会誌, 第25号, 1993年.
- 吉川 登, 鑑賞学に関する指導事例, 「教員養成大学・学部における美術教育の課題と展望」39～40頁, 日本教育大学協会全国美術部門新教育課程検討特別委員会, 1997年.
- 吉川 登, 鑑賞教育のパラダイムの転換, アート・エデュケーション第23号, 建帛社, 1994年.
- 中村俊春, 視覚表現の多義性と解釈——カラヴァッジオ作「聖マタイの召命」に関する一考察——, 京都大学美学美術史学研究会編「芸術の理論と歴史」, 思文閣出版, 1990年.
- 神吉敬三他編, 「世界美術大全集, バロック1」, 小学館, 1994年.
- T. ウィルソン・スミス, 「カラヴァッジオ」, 西村書店, 2003年.
- H. Hibbard., Caravaggio, London, 1983.
- M. Kitson., The Complete Paintings of Caravaggio, London, 1969.
- P. Adorno., L'Arte Italiana, Vol. 2, Il Rinascimento e il Barocco, Messina-Firenze, 1986.
- C. Bertelli, G. Brigantti, A. Giuliano. ed., Storia dell' Arte Italiana, Vol13, Milano, 1986.